

# インドの結婚式

東方研究会専任研究員

清水晶子

インド内陸部のデリーの十月はぬけるような

青空とまだまだ強い日差しが照りつける。とは  
いっても三カ月にわたる雨期が完全に終わっ  
て、それからの数カ月間は最も過ごしやすい季  
節である。たて続けにダセラ・デイワリーと  
いったインドの二大祭りが宗教のいかんを問わ  
ず全土で催され、お祭り気分が一色に彩られる。  
また通りで結婚式の行列にしょつ中出くわすの

もこの頃からである。

私のインドでの留学生活がスタートしたの  
が、ちょうどこのダセラのお祭りの前だった。  
その上、ご厄介になったお宅の一番下の息子さ  
んの婚約式を一週間後にひかえていたので、す  
でに遠方の親戚の人たちが滞在していて、大家  
族がさらに大所帯になってにぎやかだった。奥  
様たちも三カ月後の結婚式の前夜に開かれる女

性たちだけの宴会の余興のために、毎日歌とドラムのレッスンに余念がなかった。そんなこともあって、異国での新生活をはじめの不安などはすっかり忘れて、喜びに浮き立っている家族の人たちとすぐにうちとけた。そして、毎夕二



結婚式の前夜祭レディース・サンギータ

階のベランダから見える華やかな結婚式の行列を通して、少しづつインドの姿が見えはじめた。

インド人―特にヒンドウ教徒にとって、結婚は神様に対する義務といわれ、通過儀礼の中では最も重要視されている。インドは多様性に富んだ国といわれているように、結婚の儀礼も属するカーストによって、地域によって、そして宗教によってもさまざまな形態が見られる。

現在でも、配偶者を当人が選ぶ恋愛結婚はほとんど見られない。親同士がカースト、学歴、肌の色（女性は色白の方が望ましいとされている）、誕生星の相性、資産状況などの条件を十分に考慮して決定する。男性側にとっては社会的地位や職業が重視され、それによって女性側が用意するダヘージュ（持参金）の額が決められる。医師・弁護士・上級職の公務員などになると相当のダヘージュの呈示をしなければ結婚の成立はむずかしい。さらに挙式の費用一切は女

性側で持ち、相応の仕度をしてとなると、花嫁の父としては、「マハーラージャ（藩王）でも娘を三人もつと破産する」とことわざにいわれるほどの負担になる。

こうして縁談がまとまると、吉祥の日・時を選んで結婚式の日どりが星占いによって決定される。占いによっては、挙式が真夜中になるような場合もあるが、都市部では招待客の都合を考えて披露宴（饗応のみ）は、夕方から行われることが多くなっている。

さて、一月吉日の結婚式の夕方、ターバンを巻き見事な衣装に身をつつんだ花婿ラジューヴは、介添えの小さな男の子と白馬に乗り、自宅の玄関先で親類の人たちから祝福のティラク（額の印）を受けて、楽隊に先導されて華々しく式場まで行列をなして出向く。大学の中庭に設けられた鮮やかな色の大きなテントが式場になっていた。まず披露宴として、次々にやって

来る招待客に立食形式でご馳走が出される。それからいろいろの儀式が進められていく。壇上で金色の刺繍で豪華に色彩られた真赤なサリーをまとった花嫁が父親から花婿に贈物として渡される儀式があり、その後新郎新婦は、白い花輪をお互いの首にかけ合う。そして最後の儀式が式場に設けられた天蓋付きの祭壇の聖火の前で行われる。二人は並んで坐り、パンディット（バラモン僧）の唱えるマントラに従って火中にギー（精製された油）・聖水・香木を捧げる。これらのものは祝祭儀礼には不可欠で、特に香木は周囲の空気を浄化し聖なる場所を作る役割を果たしている。また祭礼に火も欠かせない。とりわけ結婚の儀礼においては、千の目を持つといわれる火がその力を現して、結婚の証人となるのである。新郎新婦が互いの衣装の端を結び合って、祭火の周囲を七回まわる「七歩の儀式」をもって、二人は晴れて夫婦として認めら



メーンハディ

れる。新婦インドウは新しい家族の一員となつた。

インドで結婚式には二度招待されたが、どちらも商売を営むジャイナ教徒のもので、なかなか盛大だった。招待客も一、〇〇〇人から二、〇〇〇人くらいはいたかと思う。それぞれグジャラート州（西部）とパンジヤブ州（北部）出身の人の結婚式だったが、式次第はほとんど同じのものであった。ただ、グジャラート出身の花婿のターバンの美しさや、男性の手にも描かれていたメーンハディの化粧、白馬の背に掛けられたすばらしいミラーワークの布などが強く印象に残っている。

結婚に関してもインドの若い人々は、かなり保守的で親の意志に逆らうことはしない。何よりも我身を置く社会の成員として認められることが大事で、そのしきたりを破ろうとはしない。人々にとって結婚の持つ意味は深い。